秋田県現代俳句協会会報

No.94
令和５年２月25日
印刷 ㈱八郎潟印刷

発行者 秋田県現代俳句協会
会長 竪阿彌 放心
事務局 〒〇一九―〇七一五
横手市増田町八木一二三
片倉 弓
TEL 〇一八二―四五―二二三三

令和四年度 第二十八回

秋田県現代俳句協会 作家賞

いのち

三種町 三浦静佳

くちびるは風生む楽器花の種
樹の瘤に春風身籠りかも知れぬ
花菜畑青年の押す車椅子
無機質な錠剤の殻余寒なお
田んぼ一枚引鳥たちを押し上げる

鈍感でいいコッペパン食う夏野
星の夜は山の拍動登山小屋
脳トレの足し算引き算梅は実に
晩涼や舌にとろける黒砂糖
友の葬萩を泥酔させており
茶柱が震えて立っている厄日
地下足袋の林檎手で割く父がいた
血管に年齢のあり冬立ちぬ
後戻り出来ぬ世蜜柑転がって
雪が来る二足歩行の朝が来る

受賞のことば

十五句の世界へ

三浦　静佳

作家賞決定の報を戴き嬉しさと共にほっとしています。応募にあたり今回はとても悩みました。組み立ては？春夏秋冬の順がいいか、だとするなら一句目はどれにしようか？何よりテーマは？

そんな中で今回は、日頃感じるようになった「加齢」をテーマに創ってみようと思い至りました。しかし創ってみると、冬雲のようにどんどん暗いイメージの広がり。「これじゃない」と仕切り直し。

スタート地点に戻って、どうしようか…と悩んでいたある日、地元の句会の席題で林檎の句が生まれました。遠い昔、父がセンナリという林檎を手で半分に割ってくれて、杉の山で食べた記憶が蘇ったからです。特に作業をした訳ではなくて、苗から杉の大木になるまでの時間、それは一世代では成り立たず次の世代へ繋がって行くというような。今の時代にはそぐわない話となってしまいましたが、林檎を食べながら聞いた父の話を記憶しています。

あの時から何年経ったんだろうか、父はとうに他界しています。尽きる命があり、生まれる命があります。人は勿論、言葉を持たない身のまわりのものへの慈しみの心を持って句を創っているだろうかと気付き、いのちをテーマにしました。あの時のセンナリの句も入れて今回の拙い十五句が出来ました。

作家賞選考の先生方には感謝しかありません。本当に有難うございました。

◇作家賞選考経過

選考委員長　船越みよ

第二十八回作家賞選考委員会は、十二月十七日（土）秋田市協働大町ビルで開かれ、竪阿彌、加藤、森田、片倉（俊）、船越の選考委員全員が出席した。

選考に先立ち、選考委員長を決め、選考方法を確認し合った。今年度の応募総数は昨年より二編少ない十編。作品は、公平を期するため、無記名のワープロ入力の形で各選考委員に配布されていたので、各委員は予め十分に検討・評価の上、選考会に臨むことができた。

初めに全体を通しての総体的な感想や疑問点を出し合った。仮名遣いの混用、類句・類想、タイトルと内容の整合性、観念的な句・作為のある句・予定調和の句の散見、配列の工夫などについて話題になった。

次に、一編ずつ時間をかけて討議し、各委員が把握しきれなかった点を中心に意見交換しながら、タイトルと内容の関連や作品全体への作者の思いに理解を深めた。

最後に各委員が一位から五位までの順位を付け集計の結果、委員全員が一位に推した「いのち」が作家賞にすんなり決まった。続いて二位の支持が多かった「里の秋」を準作家賞に、更に投票の結果や意見をもとに協議を重ね「つくしんぼ」と「顔」を入選とした。

今年度は、ウクライナの戦禍をテーマに切り込んだ意欲作があった。映像や情報から想像力をはたらかせて詠むことの難しさを各委員が痛感している。また、一句からタイトルを付ける場合であっても、作品全体にテーマが広がってゆく配慮が必要であるとの指摘もあった。

高齢化や会員の減少、感染症の拡大などが応募者数の減少に影響しているようだが、応募された十名の方々の熱意と挑戦への意欲を讃えたい。自分の俳句を見つめ直すためにも来年度はより多くの会員の応募を願っている。

準作家賞

里の秋

横手市　片倉　弓

峡の雨きれいに鮎を食む人と
ポケットに団栗出羽は休火山
新松子明るい雨の多い村
通草熟る一人で育った顔をして
みどり児のたつたたんたん秋澄めり
切りのなき仕事やぎすの鳴き止まず
ゆったりと手を働かせ過ごす秋
綴ぢ糸の解れ始めし峡稲田
ダンボールたたみて里の秋ひろぐ
耳遠くなりたる父の威銃
むせてゐる母の頭上や小鳥来る
索引のしんがり吾亦紅の風
花芒峡のすき間を埋める雨
脇道はいくつもあります冬隣
棟梁のしゅっと巻き尺雁渡し

入選

つくしんぼ

にかほ市　齋藤　みどり

三兄弟一人は母似つくしんぼ
母の日や靴下にも名の記して
靴紐を結び直して夏に入る
新盆や仕立て上がりの写経軸
好物を小皿に少し夕端居
蟣蠓の一と日も同じ命かな
啄木鳥や寺に大樹の五六本
鳴くような夜の雨音白露かな
新聞に包む野菜の冬支度
常備薬転がる先に師走かな
新走り語り継がれし武勇伝
冬晴や柩は村を一周す
雪捨てや記録を伸ばす万歩計
雪捨ての夫の一服上和菓子
久々の夫の鼻歌春隣

入選

顔

能代市　岸部　吟遊

おろおろと奇禍にとまどふ賢治の忌
丹を帯びし縄文貌の鮭のぼる
この先は引き算の日々秋ともし
すれ違ふ縁の数多花芒
凩やあはき日輪追ひ落とす
母の指ついと触れゆく青木の実
かんたんな顔になりけり日向ぼこ
いつからを余生と言ふや根深汁
身も家もゴツと音鳴る冬籠
読み切れずのっぺらぼうのマスク顔
冬銀河馬の背路を譲り合ふ
起上り小法師を揺らし年暮るる
津軽塗の螺鈿の綺羅や春を待つ
雪形へ畦の遥かに続きけり
たなごころに土の弾力日雷

◈作家賞の選考を終えて

選考委員　竪阿彌　放心

第二十八回秋田県現代俳句協会作家賞には十編の応募がありました。応募数は少なめでしたが、レベルは例年と比べて遜色のないものでした。ただ、飽くまで私の感想ですが、上位の作品は、一・二・三・四とくっきり差がついているように思いました。

私は「作家賞」に「いのち」を推しました。まず四句抜いてみます。

・樹の瘤に春風身籠りかも知れぬ
・鈍感でいいコッペパン食う夏野
・星の夜は山の拍動登山小屋
・地下足袋の林檎手で割く父がいた

作品全体に手ざわり感があります。一句一句に具象性があり、表現が安定しています。「地下足袋の」句は、「林檎手で割く」が挿入されていて、実に巧みであると感じました。

「準作家賞」は五人の選考委員のうち、大方が推した「里の秋」に決まりました。

・棟梁のしゅっと巻き尺雁渡し

「棟梁のしゅっと巻き尺」は近景（手元に見えるもの）、「雁渡し」は遠景。その対比が絶妙です。私には青空が広がっているように思われます。二物衝撃の句法が壺に嵌った一句になりました。

応募数は十編でしたので、賞はそれに比例するように全体で四編となりました。「入選」は二編でしたが、私は「つくしんぼ」「顔」の順に推しました。

・三兄弟一人は母似つくしんぼ

「つくしんぼ」の十五句は、全体に作品が軽いと思いましたが、この軽さがこの作者の持ち味かもしれません。挙句から作品全体の題が付けられたのでしょうが、「三兄弟」と「つくしんぼ」が相応しています。

「入選」二作目は「顔」です。安定した作品群ですが、それだけに既視感を覚えることもあります。一句を引いて、全体の終わりとします。

・この先は引き算の日々秋ともし

◈選考寸感

選考委員　加藤　昭子

今年度の作家賞には、昨年度より二編少ない十編の応募があり、十五句を揃える力量、テーマ、句の配置、発見や切れなど考慮すると共に、各作家の個性、表現の思念など学ぶ事が多々ありました。

○作家賞「いのち」

・くちびるは風生む楽器花の種

・無機質な錠剤の殻余寒なお

・友の葬萩を泥酔させており

・地下足袋の林檎手で割く父がいた

昨年に続いての作家賞。二物の取り合わせが秀逸、一瞬にして対象を掬い取り、軽々と心象を乗せる安定感がある。春の明るさ。錠剤の殻から感ずる余寒。萩の揺れを泥酔と見立てた感性。父を偲ぶ一句と自在だ。

○準作家賞「里の秋」

・峡の雨きれいに鮎を食む人と

・みどり児のたつたたんたん秋澄めり

・索引のしんがり吾亦紅の風

・棟梁のしゅっと巻き尺雁渡し

日々の暮らしを丁寧に詠み上げ、平明な句群に引かれた。毎日、向き合う家族との一コマ。中七のオノマトペの斬新さ。改めて「吾亦紅」の頁を繰らせる巧みな発見。棟梁の仕事ぶり、動きを掬い取る上手さが光る。

○入選「つくしんぼ」

・母の日や靴下にも名の記して

・新盆や仕立て上がりの写経軸

・鳴くような夜の雨音白露かな

・久々の夫の鼻歌春隣

デイサービスに行く家族への配慮と見た。新盆を迎える設いへの思い。白露に降る雨音を鳴くようだと捉えた。夜の秋気を五感で受け止める。春を待つ夫婦の穏やかな明るさが良い。

○入選「顔」

・かんたんな顔になりけり日向ぼこ

・読み切れずのっぺらばうのマスク顔

・津軽塗の螺鈿の綺羅や春を待つ

・雪形へ畦の遥かに続きけり

日向ぼこの心地良さが顔に表れた。かんたんな顔と感受した独特さ。コロナ禍のマスクは皆、同じ顔に見えてしまう現状。津軽塗りの螺鈿の美しさが春へと導く。雪形は春を報せる合図、北に暮らす人々の土への愛着と見た。

○その他共鳴した句

・枯向日葵酷きまで種犇めける

・小走りの靴の片減り涅槃西風

・がまずみや少女は恋を秘めしまま

・霊山にしみ入る経や蝉時雨

・終活拒否新米を炊く釜を買う

・人力車春の川から手信号

◈選考寸感

選考委員　片倉俊秀

会員数の減少と共に作家賞への応募数が減っている。本年度は十編であった。しかし内容は少数精鋭というべきか。

○作家賞「いのち」

・くちびるは風生む楽器花の種
・樹の瘤に春風身籠りかも知れぬ
・星の夜は山の拍動登山小屋
・友の葬萩を泥酔させており
・地下足袋の林檎手で割く父がいた

「いのち」をテーマとして内容的にも広がりがあり、作者の命に対する畏敬の念を感受できる。とりわけ一句目の句はメタファー（暗喩）とメトニミー（換喩）を駆使した作品になっており見事だ。

内面の意識をどう表出させるかは、いつも大きな課題だが比喩的表現を駆使することで、イメージ化、映像化に成功している。言葉をクローズアップさせる言葉の選択力の強さが感じられる。

○準作家賞「里の秋」

・峡の雨きれいに鮎を食む人と
・みどり児のたつたたんたん秋澄めり
・索引のしんがり吾亦紅の風
・棟梁のしゅっと巻き尺雁渡し

俳句に透明感やリズム感、ウイット感などがあり、一句一句が充実している。気負いのない身近な言葉を使い日常の一コマを掬いとっている。ふと立ち止まらせるような視点をもっており軽快である。特に取り合わせが巧みで新鮮な詩情を形成し作品を豊かなものにしている。

○入選「つくしんぼ」

・三兄弟一人は母似つくしんぼ
・冬晴や柩は村を一周す
・雪捨ての夫の一服上和菓子

母を亡くしたのだろうか。母への思いが素直に詠まれている。三句目の「夫」は、母似の「つくしんぼ」（子）なのであろうか。命のバトンの象徴にもなっている。命の営みを静かに見つめ感じとっている作者がいる。共感した。

○入選「顔」

・おろおろと奇禍にとまどふ賢治の忌
・読み切れずのっぺらぼうのマスク顔
・雪形へ畦の遥かに続きけり

思えば来し方、いろいろなことがあった。そこに展開する様々な人の顔がよぎる。顔をテーマにしながら心情を自由に表現している句群である。今までの顔、今の顔、これからの

顔。暮らしを坦々と詠んでいる。三句目の雪形は鳥海山の「種まき爺さん」の顔だろうか。想像が膨らむ。

○その他共感した句

・灯火なき街寒星の威をかぶる
・生きたがる五体鍬研ぎ柄を替える
・湯治場の留守居や千の軒氷柱
・次の世もかくありたいと冬紅葉
・人力車春の川から手信号
・だしぬけに妻の叱責青嵐

◇挑戦こそ学び

選考委員　船越　みよ

○作家賞「いのち」

・くちびるは風生む楽器花の種
・樹の瘤に春風身籠りかも知れぬ
・無機質な錠剤の殻余寒なお
・星の夜は山の拍動登山小屋
・茶柱が震えて立っている厄日
・雪が来る二足歩行の朝が来る

三年連続の作家賞受賞に作者の熱意と挑戦への意欲、磨きのかかった感性を感じた。口笛からの風生む楽器の把握、樹の瘤に身籠りを感じる春の明るさ、茶柱に厄日の季語の斡旋等、独特のものがある。対象の捉え方と言葉の組み立て、配合、発想からイメージしたものを形象化する巧みな力が魅力的であり、単調に流れないインパクトのある作品であった。

○準作家賞「里の秋」

・峡の雨きれいに鮎を食む人と
・新松子明るい雨の多い村
・みどり児のたつたたんたん秋澄めり
・切りのなき仕事やぎすの鳴き止まず
・脇道はいくつもあります冬隣

作者の暮らす里の秋から自然や家族、人々の生活を丁寧に掬い上げている。柔らかい感覚に裏打ちされた抒情が感じられ、構えずに素直に表現している良さが伝わってきた。みどり児のオノマトペのリズム感、脇道は寒い冬へ向かう心象とも捉えられ、タイトルが作品全体を包み込んでいてほっとさせられる作品であった。

○入選「つくしんぼ」

・三兄弟一人は母似つくしんぼ
・好物を小皿に少し夕端居

・常備薬転がる先に師走かな

日常生活の春夏秋冬を平明に詠んでいる。表現に落ち度がなく俳句の素材を物や形のあるものから捉えているので伝達性があり安心して読むことができた。作品全体を象徴するタイトルの工夫が欲しい。

○入選「顔」

・丹を帯びし縄文貌の鮭のぼる

・かんたんな顔になりけり日向ぼこ

・身も家もゴツと音鳴る冬籠

遡上する鮭の一心不乱の貌、日向ぼこの顔を想像する楽しさ、冬籠の音に身構える顔など、タイトルの「顔」が作品全体に通底しており、自分の目と感覚で捉えている作品である。最後の四句はやや単調に流れた感じがして残念であった。

○入賞には至らなかったが共感した句

・枯向日葵酷(むご)きまで種犇(ひし)めける

・ひとけたの余生昼寝のふかぶかと

・だしぬけに妻の叱責青嵐

・峡谷に新しき橋秋ざくら

・ベッドにも一杯皆で大福茶

・人力車春の川から手信号

◈選後寸感

選考委員　森　田　千枝子

先ずは、力作をお寄せ頂いた十人の皆様の熱量に心からの敬意と感謝を表したい。

○作家賞「いのち」

・樹の瘤に春風身籠りかも知れぬ

・友の葬萩を泥酔させており

・茶柱が震えて立っている厄日

・雪が来る二足歩行の朝が来る

何度でも対話したくなる句が並ぶ。作者の情感を嗅ぐ能力、その多様な句材と豊かな発想力は、日々の詩眼の賜物か。自由自在な切り口で虚と実を絡ませ、読み手を誘引していく弾力感。どの句も、いまそこにある見落としそうな生命を掬い取り、十七音の新しい詩の世界を醸し出す。三年連続の作家賞受賞に心から拍手を送り、更なる作品の深化を期待したい。

○準作家賞「里の秋」

・新松子明るい雨の多い村

・耳遠くなりたる父の威銃

・棟梁のしゅっと巻き尺雁渡し

日常から掬い取る作者の句材は、暮らし向きのどれもが優しく響き、一語一語が淀みなく流れてタイトルの持つ柔らか

な世界に帰着する。「明るい雨の多い村」などの措辞は巧み。ただ十五句の中に「雨」「秋」「峡」の句が三句ずつあり、作者の感慨の深さも伝わってきたが、連作として読んだ時に若干、訴求力が削がれる傾向にあるので、別の切り口で攻めるのもいいかと思う。全体として詩情豊かな句群だった。

○入選「つくしんぼ」

・新盆や仕立て上がりの写経軸
・蟻蠓の一と日も同じ命かな
・常備薬転がる先に師走かな

句群は一つの命を失ったことから紡がれていると感じた。故人との回想シーンから始まり、遺族の思い、暮らしが前向きな明日へと続いている。後半にもう少しインパクトがあってもいいかと思う。

○入選「顔」

・丹を帯びし縄文貌の鮭のぼる
・身も家もゴツと音鳴る冬籠
・津軽塗の螺鈿の綺羅や春を待つ

命懸けの鮭の遡上に、丹を帯びた縄文貌を捉えた独特な感受。陰影のあるギトギトした一枚の油彩画のように飛び出てきて、好きな一句である。全体に硬質で重厚感のある作品が並び好感が持てた。

○入賞以外に共感した句を挙げ、次回に期待したい。

《枯向日葵酷きまで種犇めける》《ベッドにも一杯皆で大福茶》《小走りの靴の片減り涅槃西風》《だしぬけに妻の叱責青嵐》《峡谷に新しき橋秋ざくら》《人力車春の川から手信号》

秋田県現代俳句協会紙上俳句大会

新型コロナウイルス感染拡大が収まらず、本年度も「吟行俳句大会」「俳句を語る会」を中止し、紙上俳句大会を実施。四十八名が参加。結果は次の通り。

〈特定選者賞〉

◆泉屋おさむ選（雑詠）

特選　郭公や山に胡座の握り飯　藤原貢太郎
秀逸　どう告げようかふらここに身を委ね　三浦　静佳
秀逸　滔々と師に師の存す天の川　岸部　吟遊

◆同（詠込「高」）

特選　白神の高さにて梨剪定す　塚本　佐市
秀逸　声高に叫び合いながら竹の子採り　工藤　進
秀逸　高尾山露月の影の夏蕨　佐々木満穂子

◆岸部吟遊選（雑詠）
特選　産土の風を枕に三尺寝　戸田佐江子
秀逸　郭公や山に胡座の握り飯　藤原貢太郎
秀逸　この先に何が起きるか冷奴　佐々木満穂子

◆同（詠込「高」）
特選　花菜咲く標高ゼロという地平　三國谷美津代
秀逸　高僧の水打つように法話説く　佐藤二千六
秀逸　青芒おのが高さの風呼べり　今田　草水

◆佐藤二千六選（雑詠）
特選　滔々と師に師の在す天の川　岸部　吟選
秀逸　目に青葉老いた五体が生きたがる　鈴木　栄司
秀逸　ゆっくりは蝸牛の依怙地坂半ば　五代儀幹雄

◆同（詠込「高」）
特選　亀鳴くや高齢誉れには非ず　佐々木建夫
秀逸　奔放に高みをめざす山の藤　首藤　圭
秀逸　花菜咲く標高ゼロという地平　三國谷美津代

◆高点句賞（雑詠）
一位　郭公や山に胡座の握り飯　藤原貢太郎
二位　薫風やもろみの匂ふ蔵の町　阿部清流子
三位　どう告げようかふらここに身を委ね　三浦　静佳
〃　産土の風を枕に三尺寝　戸田佐江子

◆同（詠込「高」）
一位　高原の牛の耳標や風光る　佐々木亮子
二位　昼寝より覚めても後期高齢者　宮本　秀峰
〃　コロナ去れ願人舞い手高く振る　鈴木　栄司
〃　青芒おのが高さの風呼べり　今田　草水

第三十六回　現代俳句東北大会

第三十六回現代俳句東北大会は、令和四年九月八日に宮城県で開催予定でしたが、新型コロナウイルスの感染状況を踏まえ、大会を紙上大会に切り替え、入選結果及び、作品集の発行となりました。

秋田県の入賞者は次の通りです。

◆山形県現代俳句協会長賞
言葉生むための無口や蟇蛙　八峰町　柴田　悦子

◆青森県現代俳句協会長賞
春キャベツほどの隙間のもの忘れ　能代市　船越　みよ

◆**岩手県現代俳句協会長賞**

父の骨拾ってからの蝉時雨　秋田市　小林万年青

◆**宮城県現代俳句協会長賞**

戦中も戦後も軍手畑を打つ　横手市　佐藤二千六

◆**秀逸賞**

残照をがわがわ汲んで馬洗う　大仙市　加藤　昭子

鳴らなかった父の草笛吹いてみる　井川町　森田千技子

蜂飼いの消えて山積みの汚染土　能代市　船越　みよ

孟蘭盆会ちらかっている家族たち　秋田市　小林万年青

おほかたは骨のなき墓終戦日　秋田市　種村聖巴子

◆**佳作賞**

花は葉になんて軽い老いのとびら　三種町　三浦　静佳

羽後訛り出そうな顔の蕗のとう　能代市　船越　みよ

雪掻いて掻いて眠りの深き村　能代市　船越　みよ

席をいま立たないで蓮がひらきそう　井川町　森田千技子

噴水の裏側に居て待ち合わす　大仙市　加藤　昭子

第五十九回　現代俳句全国大会

全国大会はコロナウイルス感染症の影響で三年振りに福岡県で開催することができました。秋田県の入賞者は次の通りです。

◆**柿本多映特選**

戦争をしている国へ鳥帰る　秋田市　小林万年青

◆**舘岡誠二特選**

蓮の実の飛び出し空家また増える　三種町　三浦　静佳

◆**秀逸賞**

戦争をしている国へ鳥帰る　秋田市　小林万年青

田水張り村を切り絵のようにする　秋田市　小林万年青

◆**佳作入賞**

蓮の実の飛び出し空家また増える　三種町　三浦　静佳

謹弔　宮本秀峰顧問　逝去

本会前副会長の宮本秀峰顧問は令和四年十一月二十五日世寿八十九歳で逝去されました。謹んでお悔み申し上げます。

宮本秀峰顧問（本名秀孝）は、昭和九年、にかほ市（旧仁賀保町）に生まれ、昭和三十二年秋田大学を卒業して教職につき、平成七年小学校長を最後に退職しました。また、昭和三十六年より曹洞宗秀泉寺の住職を長い間勤めました。

俳句は昭和五十二年『寒雷』に入会し、平成十九年『寒雷』同人となりました。特筆すべきことは、平成二十六年、秋田県で開催された「国民文化祭」の折、にかほ市で俳句大会が開かれましたが、その実行委員長的立場で準備万端調えられ、成功に導かれたことです。

平成十八年には第一句集『花木槿』、平成二十二年には第二句集『百日紅』、平成二十八年には第三句集『枇杷』を上梓しました。翌平成二十九年二月には『枇杷』により秋田県芸術選奨を受賞し、同年十二月に秋田県芸術文化章を受章しました。

（会長　竪阿彌放心）

作家賞応募について

近年、作家賞応募者が減少している。会員の高齢化やコロナ禍ということもあろう。大きな課題の一つである。新作十五句をまとめるには、かなりの数を作り、推敲し、自選し、並べ替え、吟味するであろう。これは、自作を見直すよい機会になり、新たな歩みにもつながる。秋田県俳壇の活性化のためにもぜひ挑戦してほしいものだ。

令和四年度の応募作品は次の通り。

①千の向日葵　②老いの初心　③女人抄　④つくしんぼ　⑤いのち　⑥里の秋　⑦秘境泥湯　⑧冬紅葉　⑨顔　⑩桜咲き

編集後記

昨年十一月にご逝去された宮本秀峰顧問は常に外寛内明を心掛けておられ、私たちの指標でした。心よりご冥福をお祈り致します。

コロナ禍やウクライナ侵攻で萎んだ社会を取り戻すにはまだまだ時間がかかりそうです。知恵と工夫を凝らし、人間に備わっている順応力を信じて出来ることから一歩ずつ前進したいものです。

今号発行に当たりご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。

（森田）